

■**徳積陳重** 日本初の法学博士。閨閥で近代法学徳積一家の祖になり、英吉利法律学校(中央大学の前身)の創立にも関わった。

ほづみのぶしげ

安政大地震・1855＝伊予国宇和島藩領で、藩士で国学者の鈴木源兵衛重舒の次男に生まれる。母は綱。名は邑次郎。鈴木家は、代々、藩の物頭格であったが、祖父重麿が国学に目覚め、本居大平に師事、その示唆を受けて、通称徳積姓を名乗り、いくつかの著作も遺した。父重舒はその長男。

桜田門外変・1860＝5歳：弟八束が誕生。
長期の公務出張の多い父に代わって、正規の学問を受けていないものの、のちの{かなのくわい}結成にも関与するほど、学問に熱心な母に教えられながら育ち、藩校(明倫館)に通学、蘭医志賀天民の子で一つ上の志賀泰山とは竹馬の友になる。

禁門の変・・1864＝9歳：

薩摩藩士密航1865＝10歳：泰山は当然(明倫館)に併設された洋学校にも通学するが、自らは漢学一辺倒、父を継ぎ、維新後も、主家に奉仕し続けながら、鈴木家を守って行く、9つ上の兄重頼の庇護を受け、

明治維新・・1868＝13歳：(明倫館)の研究塾兼寄宿舎(培寮)では、常に成績トップ。維新後の扱いに憤激した父は徳積に改姓。父の同僚入江佐吉の幼い娘の将来の婿として望まれ、**入江家と養子縁組(婚約)**、

戊辰戦争終・1869＝14歳：17歳より上が入る(達寮)の監督者末広鉄腸らが詩文を指導、毎月数回開かれる両寮合体の研究会でも才能を発揮し、幼君伊達宗陳の相手役を命じられるほどであった。

初の日刊新聞1870＝15歳：洋学を学ばさせる宇和島藩の貢進生に抜擢され、泰山の父の同行を得て上京し、大学南校に入学、

廃藩置県・・1871＝16歳：藩校(明倫館)は廃止、父も免職になる。泰山が大学南校独逸語の部に入学、

学問のすすめ1872＝17歳：父が重樹と改名。

明治6年政変 1873＝18歳：大学南校が開成学校と改称された年、入江陳重と名乗る。

初の民間工場1875＝20歳：育児、幼児教育、家庭医療などを書いた英書からの翻訳した「斉家必携 壺」を発表、式は無い。

三つの内乱・1876＝21歳：養家の援助で留学し、ロンドン大学キングズ・カレッジを経て、ミドル・テンプル法曹院に入学し、法理学及びイギリス法を研究するかたわら、法学の枠を超え、激しい議論的になっていたチャールズ・ダーウィンの進化論、ハーバート・スペンサーの社会進化論など、幅広く研究、

西南戦争・・1877＝22歳：開成学校が東京大学になる。競争試験でトップ、年間唯一人の一等学士に選ばれ、日本でも新聞記事に。

沖縄県編入・1879＝24歳：卒業し、バリスター(法廷弁護士)登録。法理学への関心が高まって、文部省に「転国ノ願書」を提出、

・・・・・1880＝25歳：許可され、ドイツに移ってベルリン大学の聴講生となり、日本民法へのドイツ法導入に寄与することに。

明治14年政変1881＝26歳：父重樹が死去。卒業して帰国し、東京大学法学部講師に就任。弟八束の結婚問題など、公私多事ななか、伊達宗城家令西園寺公成から、渋沢栄一の長女歌子との縁談を持ち込まれると、入江家と縁を切って、

新体詩抄・・1882＝27歳：***徳積姓に復帰して結婚。東京大学教授に昇り、外国人教授を差し置いて、法学部長も兼ねる。民法のみならず、比較法学・法史学・法哲学等の幅広い分野で日本法学の先駆者、開拓者として活躍して行く。**

岩倉具視没・1883＝28歳：母綱が死去。志賀泰山は日本初の林学専門の官立学校東京山林学校の助教授になり、2年後、ドイツ留学。

秩父事件・・1884＝29歳：法学協会の会誌(法学協会雑誌)創刊にあたり、論文「民事訴訟用印紙規則に付 本邦と英独の比較」を寄稿。

内閣発足・・1885＝30歳：司法省の援助を得、増島六一郎、菊池武夫らとともに、英吉利法律学校(のちの中央大学)を創立。5年間の専修学校(のちの専修大学)に始まり、東京法学校(のちの法政大学)、明治法律学校(のちの明治大学)、東京専門学校(のちの早稲田大学)と続いてきた創設ラッシュの最後で、**“五大法学校”**と呼ばれるようになる。

国民之友始・1887＝32歳：矢田部良吉らとともに、鹿鳴館の舞踏会に仮装して出演。この前後をピークに、連年、論文を発表、

初の対等条約1888＝33歳：**箕作麟祥・田尻稻次郎・菊池武夫・鳩山和夫とともに、日本で初めての法学博士号を授与される。**

帝国憲法発布1889＝34歳：講師就任時に学生だった江木衷や奥田義人らが、この年からの民法典論争で、延期派の中核を担うが、自らは、英仏両派の派閥的感情的争いからは距離を置き、学者的見地からの公平な法典批判に徹する。

帝国議会始・1890＝35歳：泰山が東京帝国大学農科大学教授になった年、井上馨による三井家政改革の相談役、渋沢栄一・益田孝・三野村利助から、家憲草案の作成を委嘱され、貴族院議員に勅選される(2年間)。**処女作で主著となる「法典論」を刊行、欧米各国の法典編纂の歴史・方法を網羅し、日本の拙速主義を批判、法典断行論者をして反省させるに足るものがあったといわれ、明治民法制定の理論的基盤となる。学説は、歴史学派・進化主義の立場に立つもので、刑法では、ロンブローゾの生来犯罪人説を研究し、新派刑法理論を日本に紹介、**

足尾鉾毒始・1891＝36歳：大津事件では、同郷の大審院長児島惟謙を激励し、犯人死刑論を非難。**続いて、井上円成による「法理学叢書」の一卷として「隠居論」を刊行。**

郡司千島探検1893＝38歳：富井成章、梅謙次郎とともに、法典調査会起草委員に就任、主査となり、民法典論争では、富井と共に延期派にくみし、断行派の梅と対立、起草に中心的な役割を果たした。**帝国大学法科大学長に就任。**

日清戦争始・1894＝39歳：

白馬会・・・1896＝41歳：東京学士会院会員となる。現行のものにつながる民法典が公布され、

子規句歌革新1898＝43歳：施行される。

Bushidou・・1899＝44歳：本多静六らとともに、泰山が日本初の林学博士に。**ローマでの万国東洋学会で発表した、**

ビブ/国産化・1900＝45歳：

田中正造直訴1901＝46歳：「Ancestor-worship and Japanese law」を、「祖先祭祀と日本法律」として出版、

教科書疑獄・1902＝47歳：**「法理研究会(法理論叢)」の一卷として、「五人組制度」刊行、**

日比谷公園・1903＝48歳：この年に、泰山は大学を退官、東洋木材防腐の設立に際し、技師長を務めるなどし、30年後に死去する。

日露戦争始・1904＝49歳：{丸善}より、英文で「新日本民法典」、

日露戦争終・1905＝50歳：

満鉄発足・・1906＝51歳：勲一等瑞宝章、

伊藤博文暗殺1909＝54歳：

明治天皇没・1912＝57歳：正三位となる。同じ法学に進みながら、学問・思想的に対立する弟八束が死去。帰省を機に、かつての藩校(明倫館)で、旧友や有志と、かねて心にかけていた**“先師祭”**を執行。**東大を退官。**

大正政変・・1913＝58歳：旭日大綬章。帝国学士院第一部論文集に、「由井正雪事件と徳川幕府の養子法」、

21ヶ条要求・1915＝60歳：男爵叙爵、徳積奨学財団から、**「叢書の一冊だった「隠居論」を再刊。高齢化の進む20世紀末に見直され、日本経済評論社などから、再刊される。**

民本主義・・1916＝61歳：{有斐閣}より、「法窓夜話」。枢密顧問官に就任、

ロシア革命・1917＝62歳：八束の弟子上杉慎吉が未定稿を整理して遺著「憲法大意」を刊行するに際し、道義上問題であるとして拒否すべきとするも、上杉と遺族の熱心さに折れるが、その跋文の結びは**‘この書で八束を知れるか、かえって罪するものではないか’**と、異様なものになっている。**帝国学士院院長に就任、**

本格政党内閣1918＝63歳：

ベルサイユ条約・1919＝64歳：中民国より一等大綬章嘉禾章。帝国学士院第一部論文集に、「諱に関する疑」、

原敬首相暗殺1921＝66歳：徳積奨学財団から、単独で「五人組制度論」を出版。宇和島町と隣接する八幡村の合併協議が頓挫した折、反対派を東京の私邸に招いて、合併の必要性を説き、実現に貢献。

水平社結成・1922＝67歳：起訴便宜主義を法制化した改正刑事訴訟法法案が成立。小石川植物園で開かれた学士院のアルベルト・アインシュタイン夫妻の公式歓迎会に長井長義夫妻らとともに出席。皇太子の宇和島市行啓に同行し、宇和島城に於ける茶会の折、皇太子の前の席には県知事を配するという県の方針に対し、英国の例を引用、**‘殿下には宇和島市民が敬意を表すべき’**と、市長を配するようにした。

護憲三派圧勝1924＝69歳：進化論的立場から天賦人権論を批判する「法律進化論」を出版することを企図したが未完に終わり、

治安維持法・1925＝70歳：**「枢密院副議長を経て議長になってまもなく、**

円本時代始・1926＝71歳：正二位まで進み、旭日桐花大綬章。**心臓麻痺のため、没した。**

死後、出身地の宇和島市で銅像の建立の話が持ち上がったが、**‘老生は銅像にて仰がるより万人の渡らるる橋となりたし’**との生前の言葉から、遺族は銅像を辞退、辰野川にかかる改築中の橋を**“徳積橋”**と命名することになった。メディアにおいて、養家を裏切った渋沢栄一の婿になったのははじめ、その兄弟、子女の結んだ閨閥関係は度を過ぎたもので、国法学者としては新知識から遠く、大学教授には不相当な生活ながら、朝野の間に重じられていると非難されることもあった。

Wikipedia「**徳積陳重**」、**徳積重行(陳重の長男重遠の長男)「明治一法学者の出発 徳積陳重をめぐる」**、